

次の文章は、『とりかへばや物語』の一節である。主人公の女君は女性であることを隠し、男性として宮中で活躍していた。ところが、権中納言(本文では「殿」)にその秘密が見破られ、迫られて契りを結んだ。その後、妊娠した女君は都から離れた宇治に住まわされ、子ども(本文では「若君」)を出産したが、結局、女君は兄弟の助けを借りてひそかに宇治から脱出した。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。なお、設問の都合で、本文の段落に①～③の番号を付してある。(配点 45)

1 ① 宇治には、若君の御乳母、明るるまで帰(注1)りたまはねばあやしと思ふに、御格子(注2)など参るほどまで見えたまはず。人びと尋ねあやしがりきこゆるに、言はむ方なくあきれて、思ひ寄るまじきものの隈々(注3)などまで尋ね求めたてまつるに、いづくにかおはせむ。言ふ方なく思ひまどふほどに、殿おはしたるに、かうかうと聞こえさすれば、うち聞きたまふよりかきくらし心まどひたまひて、ものもおぼえたまはず。「さても、いかなりしことぞ。日ごろいかなるけしきか見えたまひし。古里(注4)のわたりより訪れ寄る人やありし」と問ひたまふを、我(注5)さへ騒がれぬべければ、乳母もえ申し出でず、「さる御けしきも見えはべらず。見たてまつらせたまふほどはさりげなくて、一(注6)ところおはしますほどは、若君を目も放たず見たてまつらせたまひつつ、うち忍び泣き明かし暮らさせたまひしを、世の中に恨めしくもおぼつかなくも思ひ聞こえさせたまふ人やおはしますらむなどこそ、心苦しく見たてまつりはべりしか。かうざまに思しめしなるらむ御けしきとつゆも見たてまつらざりき」と聞こゆるに、言はむ方なし。

2 ② 限りなく(注7)のみもてかしづかれたりし身を、いとかく忍び隠(注8)へたるさまにて、あなた(注9)さまのことを心に入れて扱ひつつ、ここにはありもつかず都(注10)がちにあくがれたりつるを、げにいかにも見も馴(注11)らはずあやしくあいなしと、思しけむを、うち見るにはすべてさりげなくやすらかなりし御けしきありさまの、かへすがへす見るとも見るとも飽く世なくめでたかりし恋しさの、やらむ方なく、時のほどに心地もかき乱り、来し方行く末もおぼえず、悲しく堪(注12)へがたきに、巡りあひ尋ねあはむことおぼえず、いかにせむとかなしきに、若君のかかることやあらむとも知らず顔に何心なき御笑み顔を見るが、限り(注13)と思ひとぢむる世のほだしいとど捨てがたくあはれなるにも、あはれ、かかる人を見捨てたまひけむ心強(注14)さこそと思へど、あさましく、ことわりはかへすがへすも言ひやる方なく、胸くだけてくやくいみじく、人の御つらさも限りなく思ひ知るる。

3 ③ 臥(注15)したまひし御座所に脱ぎ捨てたまへりし御衣(注16)どものとまれるにほひ、ただありし人なるを、引き着て、よよと泣かれたまふ。かばかりのことを夢に見むだに覚めての名残(注17)ゆゆしかるべし、かたちけはひの言ふ方なく愛敬(注18)づきにはほひ満ちて、憂きもつらきもあはれなるも、いとにくからず心うつくしげにうち言ひなしたまひし恋しさの、さらにたとへて言はむ方なく、胸よりあまる心地して、人の(注19)をこがましと見思はむこともたどられず、足摺(注20)りと言ふらむこともしつべく、泣きてもあまる心地して沈み臥したまひぬる御けしきの、いみじくいとはしくわりなきを、見たてまつり嘆(注21)かる。

(注) 1 帰(注1)りたまはねば——女君が乳母の部屋から戻ってこないということ。前の晩、乳母は女君がその兄弟に会う場所として自分の部屋を提供していた。

2 古里(注2)のわたり——女君の実家や縁者。

3 我(注3)さへ騒がれぬべければ——自分までもが責め立てられそうだとということ。乳母は、女君とその兄弟が会うために協力したことを、権中納言に知らせていなかった。

4 限りなく(注4)のみもてかしづかれたりし身——かつて男性として宮中に出仕していた頃の女君のこと。

5 あなた(注5)さまのこと——都にいる別の女性のこと。この女性は権中納言との子を出産したばかりであった。

6 限りと思ひとぢむる——ここでは、若君を見るのもこれが最後と決意して、出家などしてしまうこと。

7 足摺(注7)り——幼児が足を動かして激しく泣く時のようなきさ。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。  
解答番号は(ア)が25、(イ)が26、(ウ)が27。

- (イ) ① どこをお探しすればよいだろうか  
② どなたにお尋ねするのがいいだろうか  
③ どこにいらっしゃるだろうか、どこにもいらっしゃらない  
④ どなたがご存じだろうか、どなたもご存じではない
- (ア) いづくにかおはせむ

- (イ) ① 都にすっかり飽きていたのに  
② 都の人々を苦々しく思っていたのに  
③ 都にばかり出かけていたので  
④ 都の生活をいつも夢見ていたので

- (ウ) をこがまし
- ① おろかしい  
② 騒がしい  
③ おそろしい  
④ わざとらしい

問2 波線部 a～d について、語句と内容に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は28。

- ① a「え申し出でず」は、「え」が「ず」と呼応して不可能の意を表し、本当のことを言えない乳母の様子を表している。
- ② b「思しけむ」は、「けむ」が過去推量の助動詞で、以前の女君の胸の内を権中納言が想像していることを表している。
- ③ c「あはれ」は、「ふびんだ」という意の形容動詞で、取り残された権中納言が自らを哀れんでいることを表している。
- ④ d「よよと泣かれたまふ」は、「れ」が自発の助動詞で、泣かずにはいられなかった権中納言の様子を表している。

問3 傍線部 A「曰ごろいかなるけしきか見えたまひし」とあるが、乳母は女君の「けしき」をどのようなものであったと答えたか。最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は29。

- ① 一人でいるときは、若君の世話もできないほど思い沈んでいる様子だった。
- ② 隠れて泣くことが多く、不満にも気がかりにも思っている人がいる様子だった。
- ③ 自分が周りの人たちに迷惑をかけることに対して、心を痛めている様子だった。
- ④ 宇治から去ろうとする強い意志があって、少しもためらいはない様子だった。

**問4** 傍線部B「見たてまつり嘆かる」とあるが、誰がどのように嘆いているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は30。

- ① 女君は宇治から逃げ出すまでに思いつめていたのに、その気持ちに気づくことができなかつた我が身を省みて、実にふがないことだと権中納言が嘆いている。
- ② 女君に会いたくて我慢できずに泣きじゃくっている若君のあどけない姿を目の当たりにして、なんとしても女君に戻ってきてほしいと権中納言が嘆いている。
- ③ 女君を失ったつらさのあまり、まわりの目も気にしていられないほど悲しみに暮れる権中納言を前にして、ひどく気の毒なことだと周囲の人々が嘆いている。
- ④ いつまでも都を恋しがってばかりで権中納言や若君のことを少しも考えなかつた女君の振る舞いに対して、あまりに冷淡なことだと周囲の人々が嘆いている。

**問5** 本文の内容と合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は31。

- ① ①段落では、乳母は、権中納言が宇治にやってきたと聞いて、叱責されるのが怖くなり暗い気持ちになった。②段落では、乳母から事情を聞いた権中納言が、女君の宇治での様子を思い出して、若君を残したまま行方知れずとなつてしまった女君の行動にも道理があつたのだと考えている。
- ② ①段落では、権中納言は、女君がいなくなったことに戸惑い、乳母がその原因を隠しているのではないかと疑っている。②段落では、権中納言は、手のかかる若君の育児を女君に任せきりにしていたことを振り返り、女君が苦悩を抱えていただろうと考え、女君を責める気にならなかつた。
- ③ ②段落では、若君は、権中納言も女君を探すために宇治から立ち去ろうとしているとも知らずに、無邪気な笑顔を見せている。③段落では、権中納言は、女君が普段はかわいらしい様子でいたのに、実は自分をひどく恨んでいたことを知って、たとえようもない後悔の念にさいなまれている。
- ④ ②段落では、権中納言は、女君が悩みを表に出さずに穏やかな態度を自分に見せていたのだと考え、その人柄のすばらしさを回想している。③段落では、権中納言は、女君の香りが残る衣服を身にまといながら、愛らしい魅力に満ちていた女君を思い出し、恋情を抑えきれなくなっている。
- ⑤ ②段落では、権中納言は、自身の女君への接し方に問題があつたことを認めつつも、何も言わず突然姿を消してしまった女君の強情さにあきれいている。③段落では、権中納言は、華やかな女君の姿が夢に出てきた後に脳裏から離れなくなり、女君との思い出に浸りながらふさぎ込んでしまった。

## 古文口語訳

宇治では、若君の乳母が、女君が夜明けまで帰宅なさらないのでどうしたのだろうと思っていたが、(女君は、すっかり夜が明けて)窓を開け放つ頃になってもお姿をお見せにならない。女房たちが(乳母に女君の行方を)尋ね、心配申し上げるの  
で、(乳母は)返す言葉もなく呆然として、思いもよらないはずの隅々まで(可能性のある場所を)お尋ね申し上げるのだが、(女君は)どこにいらっしやるのであろう、そんな所にはいらっしやらないのだ。(こうして乳母が)言葉もなく思い乱れていると、中納言の殿がいらっしやるので、(乳母は)「こうこう」と申し上げると、(殿は)その言葉を耳になさったはしから、心が暗くなり混乱なさって、正気ではいらっしやらない。(中納言は乳母に)「さてさて、どうなってしまったのか。(女君は)ここ数日どのような様子であったのか。もと住んでいたあたり(京都)から訪れてきた人はいたのか」とお尋ねになるので、自分までがとがめ立てられてしまいそうであるので、乳母も(女君が昨夜から乳母のの家にいるという真相を)申し出ることができず、「そのような様子も拝見できてはおりません。(私がお姿を)拝見している時は何気ない風でいらっしやいました  
が、お一人でいらっしやる時は、若君を片時も目を離さないで見つめ申し上げなさりつつ、人目を忍んで夜通し泣き明かしていらっしやったので、世の中に恨めしくも気がかりに思い申し上げていらっしやる方がいらっしやるのであろうなどと、心苦しく思つて拝見しておりました。このようにお思いになる(姿をくまます)ようなお姿とは少しも拝見しておりませんでした」と申し上げるので、中納言は何とも言葉がなかった。

(男として宮中に出仕していた時に)この上なく大切にされもてはやされていた身を、(私(中納言は)こんなふうにつきり人目を避けて隠れた生活を続けさせてしまい、あちらの方(都にいる女性)のことを気にかけてふるまい、ここには寄り付きもしないで都の方にはばかり気が向いていたのを、本当にどれほど(女君は)いつまでも慣れることなく不意で不快なことと思つていらっしやったであらうに、ちらつとお姿を見るとまったくそんな気配はなく平穩であったお姿やご様子の、じっくり何度も見ても見ても飽き足りないほど深い恋しさが、どうにも拭えず、時が経つにつれて心も乱れ、過去も未来もよくわからず、悲しくて堪えがたいので、(失踪した女君とこれから先)めぐり合い訪問し合うような未来は感じられず、どうしようかと思うと悲しいうえに、(一人残された)若君がこんなこと(母親に見捨てられたこと)があるうなどとは知らない顔で何心もなく笑顔になつているのを見るのが、「若君の顔を見るのもこれが最後」と未練を断ち切り出家してしまう障害となる若君をますます振り捨てがたく(女君が思ったであらう)悲しみが深いのも、

ああ、こんな人(若君)をお見捨てになつた時の決意の強さよ、とは思ふものの、理解が追いつかず、理屈ではどうやっても言葉にすることができず、胸がつぶれるような思いで後悔とつらさがまさり、女君のつらさも(自分のことのように)どこまでもわかつてしまうような思いがする。

お休みになつていたお部屋に脱ぎ捨てなされた衣服が放つ残り香が、そのままそこにいた人の思い出であり、(中納言はそれを)我が身に重ねて、よよとお泣きになる。これほどのことを夢に見るような場合でさえ目覚めての(悲しみの)名残は強烈であらう、(女君の)容貌や雰囲気と言葉にできないほど魅力的で香り立つように思われ、気がふさいだ時もうらい時も悲しい時も、(女君が)まったく心を傷つけることなく心穏やかに言葉になさった(ことに対する)恋しさが、今さらながら何にたえても言葉にできず、胸からあふれる心地がして、他人が「愚かしい」と見たり思つたりするであらう、ということも気にならない(ほど悲しくて)子どものする地団駄と言うようなこともしてしまいそうで、泣いても気持ち収まらない心地がして沈み込んでいらっしやるご様子が、とてもおかわいそうでどうにもしてあげられないのを、(乳母は)拝見し、嘆く気持ちが抑えられない。

## 本文

中納言が、「あの龍角の琴は、私がただいて、娘いぬのお守りにしましょう」（言った。）尚侍のおとどはふと笑って、「（誕生後）すぐにでもと（おっしゃるのは）、さあ（いかがでしょう。）それにしても、こんな折に言うべきいわれがあるのですか」とおっしゃるので、（中納言は）「世間一般のことでしたらどうでございましょう（私は知りません。）（しかし、祖父によれば）われわれ琴の一族がいるところ、（龍角の琴の）音がするところには、天人が天より駆け下ってお聞きになるそうですので、（娘の出産の祝いに）添えておこうと思って（お願い）申し上げるのです」（と言う。）尚侍のおとどは、女官の典侍をつかって（夫である）大将のおとどに、「例の、私の琴が、いま必要とされているようだ。取らせよう」と申し上げなされたので、（大将のおとどは）急いで（自宅である）三条殿にお渡りになり、（龍角の琴を中納言に）受け取らせなされた。

（中納言の妻の兄弟である）三の宮が、（琴を）お取りになって、中納言にお渡しになったところ、（琴は）唐の縫い物の袋に入れている。娘を懐に入れて抱きながら、琴を取り出しなされて、「ここ数年、この琴の奏法を、どうしましょうか（＝誰に伝えようか）と思い嘆いておりましたのに。これからのことはわからないが」などと言って、ほうしようという（名の琴の）曲を、華やかに弾く。その音はとても誇らしげでにぎやかなものではあるが、一方では、しみじみと物寂しい凄みもある。いろいろなものの音が多く響き合い、琴の音が調和する響きは、向かい合って（近くで）聞くよりも、遠くに響き渡っている。

中納言が（娘の誕生という）こんな折りにふさわしい曲を、大きな音で弾いていると、風が荒々しい音を立てて吹いてくる。空の様子も騒がしく見えるので、「前にもあったとおり、（琴という）ものには（天変地異を呼び寄せる力があるようだから）気軽に手を触れにくいものだなあ。面倒なものだ」と思って弾くのをやめて、母尚侍のおとどに申し上げなされる。「今、曲をいさし演奏し申し上げようとしたが、穏やかならぬ状況なので、できなくなった。（母上が）この琴で曲をいさしお弾きになって、鬼を逃がせなされて下さい」と申し上げなされるので、（母尚侍のおとどは、）「体裁が悪いようだ」（とおっしゃる）。中納言は「私仲忠のために、今よりもふさわしい機会はございませんでしょう」と申し上げなされるので、母尚侍のおとどは（娘のいる）御帳台の床からお下りになって、琴をお取りになって、いさし曲をお弾きになる。その音は、まったく言葉にできるものではない（ほど）素晴らしい。中納言のご演奏は、目が覚めるほど険しく、雲や風の様子が異色な風景を見せるのに、この尚侍のおとどの

ご演奏は、病気の者や、恐怖にふるえ悲しみに沈む人も、これを聞くとき皆忘れて、明るい気持ちで心がしっかりし、長生きできるような心地になる。こういうわけなので、（中納言の妻である）宮は、（御帳台の中で）琴のご演奏をお聞きになったので、そのままであらうしゃった時よりも若やいで、（出産というたいへんな）ことをしたのだともお思いにならず、苦しいこともなくて、起き出して座っていらっしやる。（それを見て）中納言の君は「そんなことをしては（悪い様子ですよ。（いくら気分がいいからといって起き上がったりせず）そのまま横におなりになって）演奏を）お聞き下さい」と申し上げなされるので、宮は、「ただ今は苦しいことはありません。このお琴を聞いたので、苦しかったことも皆おさまりました」と言って座ったままでいらっしやる。（宮の母である）女御の君や（中納言の母である）尚侍のおとどは、「風邪をひいてしまいますよ」と言って、（宮を）何とか寝かしつけ申し上げなされる。琴は、すっかり弾き終わりなされたので、袋に入れて、宮の枕許に、お守り刀を添えて置いた。

## 問5

（右大臣）「（婿の母である）尚侍などが琴を弾いておりました折は、感興がございましたなあ。とても珍しくも素晴らしかったことですよ」

（帝）「その琴は、どのようなものか」

（右大臣）「尚侍が、昔から弾いておりました龍角と承っております。それを生まれたあの子に持たせました」

（帝）「とてもすばらしいものを手に入れた娘であるよなあ」

## 本文

客余に問ひて曰はく、「子は詩を学ぶに、唐か、宋か」と。曰はく、「我は必ずしも唐ならず、必ずしも宋ならず、又た必ずしも唐宋ならずんばあらず。見るべし、不必の二字、是れ我が宗旨なり」と。

東坡云ふ、「詩を作るに此の詩を必とするは、定めて詩人に非ざるを知る」と。知言と謂ふべし。窃かに世の詩流を視るに、詩の巧拙を問はず、同じきに党し異なるを伐ちて、忿争すること狂ふがごとし。是れ狹見の然らしむと雖も、亦た已だ駭ならずや。人の口を極めて白石・南郭を罵りて、以て偽詩と為す有り。余其の詩を観んことを請ふ。意を立つること陳腐にして、但だ多く生字を用ゐて、以て其の拙を掩ふのみ。余因りて謂ひて曰はく、「白石・南郭は誠に偽詩を作り、吾子は誠に真詩を作る。然れども吾子の詩は、譬へば真瓦なり。二子の詩は、譬へば偽玉なり。真瓦の値、廻かに偽玉の下に在り」と。

## 問7

余は詩に於いて偏好する所無し。其の風調の異同を問はず、佳き者は之を取る。但だ生硬・拙俗にして、諷詠するに韻致無き者は名人の作る所と曰ふと雖も、我は則ち取らざるなり。

## 本文

客人が私に質問して言った、「あなたは詩を学ぶのに(理想にしている時代は)唐ですか、宋ですか」と。(私は)言った、「私は必ずしも唐を理想とはしておりませんし、必ずしも宋を理想とはしておりません。そしてまた必ずしも唐・宋でなければならぬとも考えておりません。ご覧なさい、「不必」の二字を。これが私の考えの核心です」と。

蘇東坡はこう言っている、「詩を作る時にこの詩を必ず手本にしようとする」とは、私がきくとこの人は真の詩人ではないことがわかるということである」と。見識のある言葉と言えるだろう。ひそかに世の中の詩の流行を観察してみると、(個々の)詩の巧拙を問わず、(自分の理想とする詩人と)同じような詩人の詩を称賛し、異なる詩人の詩を攻撃して、まるで狂ったかのように紛争している。これは(詩作に対する)狭い了見がそうさせているのであるが、なんと愚かなことではないか。

人々が口を極めて白石や南郭を罵って、その作品を「偽詩」とする、という風潮がある。どうか私にその(ように主張する人たちが作った)詩をよく見させてください。主題の立て方は陳腐であり、ただ見慣れない字を多く用いてそれによって作品の拙劣さを覆い隠しているだけである。私はこのことからこう言う、「白石や南郭はまことに偽詩を作っており、あなた方はまことに真の詩を作っている。しかしながらあなた方の詩は喩えるならば『真の瓦』である。(一方)白石や南郭お二人の詩は喩えるならば『偽の宝玉』である。真の瓦の価値は、はるかに偽の宝玉の下にあるのだ」と。

## 問7

私は詩において偏った好みを持つことはない。作者の詩風の違いなどは気にせず、良い詩はこれを認める。ただし、生硬であったり拙劣であったり俗悪であったりして、朗唱するに際して気品や風情のない詩は名人の詠んだ詩であっても、私は認めない。